

2021年10月24日（日）

宣教 『イエスの元に来る人々』

テキスト：マルコによる福音書6章53～56節

先週は皆様と共に、洲本教会の創立118周年記念礼拝を捧げることができて感謝しています。また礼拝後の敬老感謝会も和やかな内に行うことができて感謝でした。ここしばらくは、マルコによる福音書を学んでいます。

今日の聖書の個所を学んでいて思い出した話がありました。

以前お話ししたことはあるのですが、

昔大阪に住んでいた中学生の頃、国語の教科書に載っていたアメリカ人の作家ホーソンの「大いなる岩の顔」という短編作品があり心に深く残りました。「主人公のアーネストはある山間の溪谷の村に育ちます。この村からは、山の上の岩が、大きな人の顔に見えるのです。村に伝わる言い伝えでは、この溪谷出身の偉大な人が何時の日か現れ、その顔は、あの山の岩にある崇高にも見える顔と同じだということです。少年アーネストは、その「偉大な人」にいつか会いたいと思い、待ち続けるのです。

ある時、溪谷に帰って来た「成功者」は莫大な金を儲けたが、アーネストには、その富豪の顔は、岩の顔とは似てもにつかぬ欲張りの顔に見えたのです。また、戦場で活躍した将軍や、政治家なども、溪谷に帰ってきますが、いずれも、アーネストには、岩の顔に相応しい、優れた人には見えなかったのです。こうして歳月が経過するうちに、アーネストは、いつしか老人になります。その暖かい心や、深い知恵、優れた精神などから、溪谷の人々から深い尊敬を受ける身となって行きました。

そしてある日、夕陽の当たる老境に達したアーネストの顔は、まさに、あの偉大な岩の顔とそっくりとなっていたのです。村人たちがそのことを語ったのです。アーネストが待ち望んだ、尊厳な人とは、村人にとって、実は彼自身であったという話です。わたしは、この話にとっても深い感銘を受けました。

こどもなりに少しでもこういう人に近くなりたいと思ったのだと思います。

さて、聖書の民であるイスラエルには、メシアである救い主がいつかこの世にやって来るといふ言い伝えを持っていました。旧約聖書に記されていることです。イザヤ書53章（P1149）の「苦難の僕」の話がイエスマを預言する言葉として有名です。

ナザレ村で少年期に過ごされたイエスこそが、神から派遣された救い主・メシアであるとの思いが人々の間に広まっていたことを思われます。

「大いなる岩の顔」を書いた小説家ホーソンもきっとイエスのことを思って

いたのでは、とひそかに思っています。

イエスさまは神の国を伝えるためにガリラヤ地方から宣教を開始されました。多くの病人を癒し、互いに愛し合うようにとの神さまの愛を人々に伝えられたのです。わたしたちも、その教えを聖書を通して多くの証し人を、すでに天に召された信仰の先達を通して今日まで聞いてきました。そのことを感謝したいと思います。

今日の聖書の個所からもそのことを学べます。

今日の聖書の個所の小見出しには「◆ゲネサレトで病人をいやす」とあります。ゲネサレトとは、町の名前ではなく、ガリラヤ湖の北西あたりの小さな平野だと言われます。以前の聖書の訳ではゲネサレとなっています。ガリラヤ湖周辺で最も自然が温暖で美しく、果樹が良く育つ場所と言われます。ガリラヤ湖で嵐を経験した弟子たちは、イエスに助けられて、ゲネサレトの地に着いたのです。本来であれば、ガリラヤ湖北東のベトサイダに行く予定でしたが、嵐のために北西もゲネサレト地方になったのかもしれません。

53:こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつ

ないだ。そこで、乗っていた舟をつなぐと、イエスを弟子たちの所に人々がやって来たのです。

54:一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、55:その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。

この地方にも救い主イエスのことはすでに伝えれていたようです。病気をいやしてくれるイエスが自分たちの所に来てくださるのを切に待っていたかのようです。そこへ病人を床に乗せて運び始めた。この姿に、マルコの2章で中風の人を4人の人がイエスの元に運んで来た姿を思い出します。

更に、56:村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。それほどまでに病気からのいやしを願っている人たちが多かったことを思われます。イエスは病気の人たちの悩みや苦しみ、家族の悩みや苦しみを自分のことのように知り感じておられたのです。約2000年前のユダヤの人々は、救い主の服にでも触れれば癒されるとの思いがあったようです。病気で命を失くす人も現代よりずっと多かったでしょう。平均寿命も、40歳か50歳までだったようです。現代の先進国では、考えられないことです。でもアフリカなどではどうでしょうか。今でも飢餓などで命を失う多くのこどもたちもいます。

主イエスは本当に多くの病気の人々を癒されたのです。自らは十字架の苦し

みを負いながらも病人の痛みや苦しみを癒されたのです。ここにイエスの愛、神の愛があります。正にイザヤ書 53 章の「苦難のしもべ」の姿です。

今日の短い個所に、「イエス」という言葉が 3 回も出て来ます。イエスという言葉は、「神は救う」という意味があります。旧約聖書のことばでは、「ヨシュア」と言われます。あのヨルダン川を渡った指導者モーセの後継ぎとされる人物の名前です。2000 前のユダヤでは、よくある名前だったと言われています。イエスさまのことは、ナザレの村で育ったということで、「ナザレのイエス」と言われます。使徒言行録では、イエスの弟子のペトロは、「ナザレ人の人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」と、神殿で物乞いをしていた人に呼びかけ、手をとって立ち上がらせたという感動的な話が記されています。

イエス・キリストの名には、人を生かす力があると信じられています。わたし自身、かつてどん底の中で、この言葉「ナザレ人の人イエス・キリストの名によって立ち上がり、歩きなさい。」に出会って、ナザレの人イエス・キリストの名の力、神の力に与って牧師人生の再出発をさせて頂いて洲本に来させて頂いたのです。聖書のことばには、時代を超えて人を生かす力があるのです。

ところで、確かに主イエスは多くの病人を癒されました。癒しを求めている人が現代でも多くいるのも現実です。

聖書の時代から実に多くの人たちが病気に苦しみ、その苦しみから癒されることを求めてイエスの元にやって来ました。今では病院に行き、教会にやって来られる方もおられます。

本当に救いとは何でしょうか？ それは単に病気が治る、癒されることでしょうか。もちろんそれもいいことですし、必要でしょう。

しかし、もっと大切なことは、たとえ病気の身であったとしても自分は愛されていると、自分のことを心配してくれている人がじると思えること、主イエスと神に愛されていると思えること、感謝できることではないでしょうか。

マルコによる福音書では、この後、徐々にイエスは病人の癒しや奇跡の業を行われなくなっていく行かれます。そこにも主イエスの深い愛が思いがあったと思うのです。苦しむ人々のためにご自身の十字架の愛を与えられたのです。神の愛が十字架に極まったのです。苦悩を負う者たちが、主イエスの十字架によって生きて行ける救いの道、神の愛に包まれて生きる道が開かれたのです。そのことを信じる者には、神の御霊、聖霊の助けによって、信仰と希望と愛の力が宿るのです。

わたちは、「病者の祈り」という詩を思い出します。

病者の祈り

～アメリカのニューヨークのリハビリテーション研究所の壁に書かれた一患者の詩です。～

大事を成そうとして
力を与えてほしいと神に求めたのに
慎み深く従順であるようにと
弱さを授かった

より偉大なことができるように
健康を求めたのに
よりよきことができるようにと
病弱を与えられた

幸せになろうとして
富を求めたのに
賢明であるようにと
貧困を授かった

世の人々の賞賛を得ようとして
権力を求めたのに
神の前にひざまずくようにと
弱さを授かった

人生を享楽しようと
あらゆるものを求めたのに
あらゆるものを喜べるようにと
生命を授かった

求めたものは一つとして与えられなかったが
願いはすべて聞き届けられた
神の意にそわぬ者であるにもかかわらず
心の中の言い表せない祈りは
すべてかなえられた

私はあらゆる人々の中で
最も豊かに祝福されたのだ
以上です。

わたしたちも、尽きせぬイエスの恵みを注がれているのですから、一人ひとりに与えられたこれからの人生を一日一日歩みたいと願います。

◆ゲネサレトで病人をいやす

53: こうして、一行は湖を渡り、ゲネサレトという土地に着いて舟をつないだ。

54: 一行が舟から上がると、すぐに人々はイエスと知って、

55: その地方をくまなく走り回り、どこでもイエスがおられると聞けば、そこへ病人を床に乗せて運び始めた。

56: 村でも町でも里でも、イエスが入って行かれると、病人を広場に置き、せめてその服のすそにでも触れさせてほしいと願った。触れた者は皆いやされた。